

～総括～

8 大人の社会力が子どもの社会力を育む



門脇 厚司
KADOWAKI Atsushi

筑波大学名誉教授/社会力総合研究所代表

子どもの遊び環境の変化に30年以上前から警鐘を鳴らしてきた門脇氏。今、「社会力」の強化が急務と訴える。社会力とはどのような能力なのか。子どもが健やかに育ち、社会力のある人になるために、大人ができることは…。

社会力をなくした子どもたちの群れ

2008年11月急逝された筑紫哲也さんは最後まで著書『スローライフ』（岩波新書）のなかでこう書いている。「世界中で、こんなに街のなかでも野や山でも子どもが遊んでいる姿が見当たらない国は他にない。こんなに目に光がない子どもたちが多い国も他にない」。子どもたちが外で遊ばなくなり、家や自分の部屋の中にもこもり、しかも、一人でテレビやテレビゲームに熱中する。そんな状態が長く続いたため、やる気や体力が衰え、未来に向かって輝くはずの目も失ってしまった、ということである。

わが国の子どもたちがこうした状態になり始めたのは最近のことなどではない。もう30年以上も前、すなわち1970年代の初め頃からのことである。私は、その頃、日本経済新聞社で仕事をしていたが、すでに、世間では、わが国に「サンマがいなくなっ

た」ことを問題視するようになっていた。サンマがいなくなったとは「三つの間」すなわち「遊ぶ時間」と「遊ぶ仲間」と「遊ぶ空間」がなくなったということである。1960年頃から高度経済成長期に入ったわが国は都市部の再開発を急ピッチで進めることになったが、その結果、空き地は高層ビル街になり、川や海は埋め立てられ高速道路に変わり、山は切り崩され住宅が立ち並ぶといった有様で、子どもの遊び場がどんどんなくなっていった。一方、高校や大学への進学競争が激しくなり遊ぶ時間もなくなった。外で遊ぶ子どもが少なくなれば、当然、群れて遊ぶ光景も見られなくなり、遊び仲間も消えていった。こうして、わが国から「サンマがいなくなった」というわけである。

こうした事態が好ましいわけはなく、私は、その頃から、子どもの人間形成の過程に異変が起り始め



写真1 地域間交流サマーキャンプ1(1982年、岩手県千厩町)



写真2 地域間交流サマーキャンプ2(1982年、岩手県千厩町)



写真3 団地内に開設した冒険遊び場1(1978年、横浜市)



写真4 団地内に開設した冒険遊び場2(1978年、横浜市)

ていることを指摘し警告を発してきた。そして、遊び場づくりや地域づくりにもそれなりのエネルギーを費やしてきた。しかし、事態が好転することはなく、むしろ悪化しつつ今日に至っている。そして、今、私たちは、社会力を著しく衰弱させ、目の輝きをなくした人間嫌いの子どもや大人の大量をみるようになった。

「社会力」という資質能力

では、「社会力」とはどのような資質能力のことか。端的に言えば「人が人とつながり、社会をつくる力」のことである。これだけでは理解しにくいと思うので、あと少し説明すれば、社会力とは、様々な人とのいい関係を作ることができ、そのいい関係を維持しながら、社会の一員であるという自覚をもって、自分が学んだ知識や身につけた技術などを、自分が普段生活している様々な場所で、例えば、家庭であるとか、地域であるとか、職場とかで、進んで発揮することができる、そうした能力のことである。さらに言えば、よりよい社会を作ろうという前向きな意識と意欲があり、そのために何をすればいいかを自分で考え、考えたことをできるところから実行に移していく、そうした、いわば、構想力と実行力があることも社会力があるということになる。

社会力が育まれる過程とそのための条件

では、このような意味での社会力はどのようにして生まれ強化されていくのか。また、そのために欠かせない条件はどんなことか。これらのことについて、ポイントを整理すると次のようになる。

まず、再確認してほしいのは、ヒトの子は誰もが、大人と直接かかわり応答するために必要な能力を生まれながらにして備えているということである。これまで、長く、ヒトの子はまったく無能な状態で産ま

れてくるといわれてきたが、ここ30年ほどの新生児の研究によって次々に明らかにされてきたことは、ヒトの子はきわめて高度な能力を備えて産み落とされているという事実である。

では、赤ちゃんが備えている高度な能力とはどんなものか。それらは、例えば、言葉として発せられる音を聞き分けて聞き取ることができる能力であり、ヒトの顔、とりわけ大人の顔を正確に見分けることができる能力であり、他人(ひと)の目の動きや顔の表情からその人の意図や感情を見抜き、それを模倣することができる能力であり、自分が今行った行為がどのような結果を引き起こすことになるかを予め推測し次の行為に備えることができる、といった数々



写真5 展望塔の上の子ども(1976年、佐賀県唐津市)

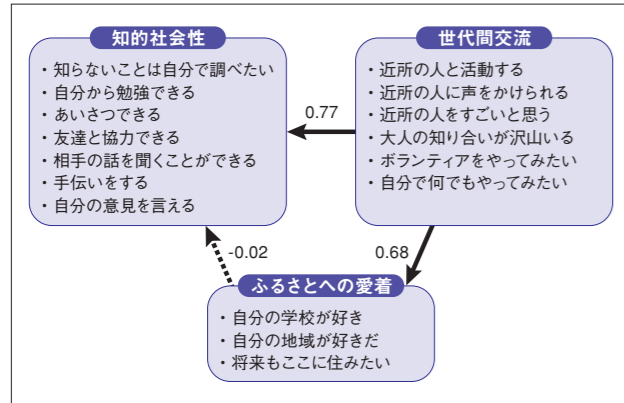


図1 社会力構築モデル(数値は相関係数)

の能力である。

生まれたばかりの赤ちゃんが備えている能力のどれもが高度な能力であることに驚かされるが、では、何ゆえに、ヒトの子がこのような高度な能力を予め備えている必要があったのか。答えは一つ。そうした能力をフルに稼働させることで大人と直に交わり応答を重ね、そうすることで社会力のおおもとである他者への関心と愛着と信頼感を培い、それをもとにさらに大人との相互行為を重ねることで社会力を強化し、社会的動物として自らを形成していくためである。

ここまでの説明に納得していただけたら、子どもの健全な成長にとって絶対に欠かせない条件が何であるかは自ずと明らかになるはずである。欠かせない条件とは、大人との相互行為、すなわち大人との直接的な交わりであり、大人との協働行為である。ところが、高度経済成長期以降のわが国では、生活空間の激変やコミュニティの崩壊、テレビやテレビゲームの普及などで、子どもと大人との直接的な交わり、交流、協働作業などが著しく減少することになった。その結果、冒頭に述べたように、子どもたちの社会化異変をもたらし、社会力の衰弱を引き起こすことになったのは、理論上必然であったというしかない。

大人との交わりが子どもの社会力を育てる

子どもは大人と直接交わり、活動をともにし、ともに泣き笑いすることで、社会力を育て、強化し、社会的な動物として成長していく。社会力を育てることで、高度な能力を身につけ、結果として、他人の気持ちや立場を理解できる人間となり、学習意欲を高め、学力を向上させ、そして、社会の一員としての自覚をもち、社会の発展に貢献できる人間として成長していくのである。

理屈ではそういうことになるのかも知れないが、果

たして、実際にそういうことになるのか。そのことを確信し実行してきた地域や学校は少なからずある。ここでは、すでに10年も前から地域の大人が学校の教育に協力する体制を作り上げ、学校教育と社会教育の融合を実践してきた山形県戸沢村と、6年前から村をあげて、毎週土曜日をテレビを見ない日にする「ノーテレビ運動」を続けてきた茨城県東海村の実践結果を紹介しておこう。

図1は戸沢村の実践に注目した山形大学地域教育文化学部が2007年度に調査した結果である。「近所の人と活動する」「大人の知り合いが沢山いる」など、地域の大人たちとの交流が密であるほど、子どもたちの「知的社会性」と「ふるさとへの愛着」が高まるという関係が明らかにされている。

また、表1は私が筑波大学大学院のわが門下生の協力を得て、2004年度に東海村で行った調査の結果である。この結果をみても、「大人と話したり、一緒に何かしたりするのが好き」「近所の大人の人ともよく話をする」「地域によく知っている大人が何人かいる」といった内容で構成されている第1因子、すなわち「大人への信頼感」としてまとめることができる因子が、社会力を育む上で最も重要な因子であることが確認できる。要するに、普段から大人と交わる機会が多く、一緒に活動している子どもほど社会力がよく育つということである。

戸沢村と東海村での調査結果は、先に説明した理屈が嘘ではないことを示すものである。

表1 社会力を構成する因子(数値は因子負荷量)

第1因子	大人への信頼感	大人と話したり、一緒に何かをしたりするのが好き	0.777
		大人の人に教えてもらいながら、一緒に何かをするのが好き	0.708
		信頼できる大人が身近に何人かいる	0.692
		近所の大人の人ともよく話をする	0.639
		地域によく知っている大人が何人かいる	0.616
第2因子	他者への配慮	お父さんやお母さんという話を話す	0.542
		相手の気持ちをよく考えてつきあう	0.652
		相手が話すことを、きちんと聞く	0.626
		引き受けたことは、最後までやりとおす	0.590
		誰にでも親切にしてあげる	0.581
		友だちが何か失敗したら、励ましてあげる	0.534
		友だちが何かしてくれたら、必ずお礼を言う	0.507
		困っている人を見ると、すぐに助けたい	0.409
第3因子	知的好奇心	他の人の話を聞くのが好き	0.398
		知らないことがあると、誰かに聞いたり、自分で調べてみたくなる	0.641
		やったことがないことは、何でも自分でやってみたくなる	0.612
		他の人がやっていることは、何でも自分もやってみたくなる	0.589
第4因子	未知の関心	知らないことは、他の人に聞いて教えてもらう	0.366
		他の国の人の悲しいニュースを聞くと、自分も悲しくなる	0.635
第5因子	人間への感	事件のことをニュースで聞くと、どうしてこんなことが起きるのだろうと、あれこれ考える	0.599
		知らない人とでもすぐに仲良くなれる	0.465
		ひとりであるより、大勢の人というほうが好き	0.460



写真6 都市郊外の冒険村1 (1976年、佐賀県唐津市)



写真7 都市郊外の冒険村2 (1976年、佐賀県唐津市)

大人の責任となすべき役割

これまで述べてきたことから明らかなように、子どもが心身ともに健康に育つためには、生まれた直後からの大人との応答が欠かせないのである。子どもの社会力を育て、一人前の健全な社会人として育て、ひとりの市民として喜んで社会に貢献するような人間に育てるには、大人こそが子どもの友達になり、できるだけ多く子どもと交わり、交流し、子どもに適切に応答し続けることが何より重要なのである。「子どもに適切に応答すること」といったが、子どもに対し適切なる応答(response)ができる(able)能力を備え、適切に応答することこそ、大人の責任(responsibility)なのである。大人たちは、まずこのことをしっかりと心得ておく必要がある。

その上で、われわれ大人は具体的に何をすべきか。子どもが健全に育つよき環境を整えることである。子どもにとってよき環境とは、「もの環境」と「ひと環境」の両者がともに好ましいかたちで備わった環境といえる。好ましい「もの環境」とは、刺激に満ち満ちた環境であり、好ましい「ひと環境」とは、多様な人間がそこにいて、彼らと交流できる環境のことである。

わが国でいえば、高度経済成長期以前の地域社会はそうした条件を備えていた。山や川や田んぼや畑があり、原っぱや空き地があり、四季折々の変化があり、地域の人的交流も濃密であった。そうした環境があったからこそ、親や教師に多少の問題があったとしても、子どもたちは健やかに育ち一人前の「大人」になることができたのである。

しかし、今、子どもたちが育つ環境は相当に劣化している。今、わが国の子どもの4人に3人が都市部で生まれ育っているが、そこは、「サンマがなくなった」どころか、テレビやゲームやケータイやクルマなどの席卷をゆるし、そこに長く身を置けばおくほど、心身の成長が害され蝕まれるようになっていく。こうした環境の劣化は農村部とてさほど変わりはない。

ではどうするか。今はもっとも急を要する二つのことを提案したい。まず一つめは大人自身が社会力を高める努力をし、子どもの応答者になり共同行為者になることである。別言すれば、大人が、一人前の「大人」として、一人の「市民」として、当たり前のことを当たり前のこととして行うよう努め、日常的に行うことである。

あと一つは、例えば、長野県の青木村が「一人の子どもを育てるためには一つの村が必要だ」を合言葉に5年前から実行しているように、地域全体を親密圏にし、子育てや教育のために地域の人的、物的、自然的資源をフルに活用する体制をつくり実践することである。そのための具体的な施策として、冒険遊び場のような「大人が常に居る遊び場」を作り運営することや、東海村が「土曜日はテレビの音より家族の声」をモットーに実際にやっているように、せめて毎週1回ぐらいはテレビやゲームから離れ、大人と子どもと一緒に企画し運営する地域ぐるみの活動を実行することなどが含まれよう。

<参考文献>
「子どもの社会力」門脇厚司著(1999年12月 岩波新書)をはじめとする社会力シリーズ本計9冊